

ヘルマン・ヘットナーの『18世紀文学史』

木村 高明

ヘルマン・ヘットナーの『18世紀文学史』

木村高明

啓蒙思想が掲げる要求は（....）大胆で、
突破力がある。何事も容赦なく批判し、
決して怯みはしない。（H. Hettner）

1. はじめに

「私がここで叙述する時代は、決して光り輝く文学時代（Literaturepoche）ではない。だが、考察に値する極めて重要な時代のひとつである。さまざまな性格〔人物〕であれ、理念であれ、すっかり虜になって、賛美するだけでは許されない。とはいえ、それらの影響は広範に及び、かつ強力なだけに、こんにちに至るまで作用は尽きない。

誰もが己れの勤勉を自慢して構わない。私自身、原典史料に基づき実直に（redlich）研究を重ねてきた。ここで扱う作家たちは、名前は多々挙げられるが、詳細は知られてはいない。黒く描きすぎた、とおもわれる向きもあろうが、概ね、明るく眩しすぎると映るかもしれない。私は見たままに描き出した（malen）。」¹⁾

これは、19世紀ドイツを代表する文学・芸術史家のひとりであるヘルマン・ヘットナー（Hermann Hettner 1821－82）の大著『18世紀文学史』（*Literaturgeschichte des achtzehnten Jahrhunderts*, 1856－70）の序文の一節である。

文学史記述を絵画描写になぞらえて、表現はじつに簡素だが、それだけに学

者ヘットナーの学問研究に対する思いが滲み出たような序文である。派手さを嫌い、目立ちはしないが、日々、地道に学究に取り組む彼の学問的態度が目に見えよう。

さて、それは別として、ここでいわれる「文学時代」とは、表題が示すとおり「18世紀」、すなわちヨーロッパ思想史のうえでは、いわゆる「啓蒙」の時代を指していることは明らかである。

ヘットナーに拠れば、啓蒙思想は広く西欧に流布伝播し、彼の時代（19世紀中葉）になっても、その「影響」（作用）は、依然として「広範かつ強力」に認められる。これだけでも、この思想（啓蒙）が内包するエネルギーの大きさは明らかであり、その永続性はおのずと認めずにはおれない、というのである。

それだけに、この啓蒙の源泉である「18世紀」という時代は、ヘットナーにとって、まさに学者魂がくすぐられる研究対象、言い換えれば、「本質」究明のためならば、どんなに時間を費やしても惜しくはない、じつに魅力的な時代といって構わないようである。

実際、この文学史は完成までに十数年の年月を要したが、このことが、なによりもヘットナーの飽くなき研究意欲の証（表れ）とみて差し支えないであろう。

文学史完成に至るこうした背景を踏まえて、改めてこの文学史の中身を覗いてみれば、分析は、ドイツ一国にとどまらない、その意味ではじつに壮大なスケールの論証であることが判明する。

まずは啓蒙の起点であるイギリスを皮切りに、次いでフランス、ドイツの順に国別に個別詳細な分析がおこなわれる。

各国で開花した啓蒙の所産、すなわち個々の文学や思想（哲学）、あるいは芸術（音楽）に至るまで、文字通り、精神の営み全般が吟味検証される。

これにより、おのずと啓蒙の批判精神が広く西欧に — 時として形を変えて — 流布浸透していった状況がつぶさに「描き出され」、結果的に、思想運動の一大パノラマが形成されている。

ヘットナーの文学史が、たんなるヨーロッパ文学通史ではなく、むしろ「精

神史」(Geistesgeschichte)の構成と見做される理由はこのあたりに認められる。いずれにせよ、学者ヘットナーの熱い思いが伝わってくるような大著であることは確かである。

だが、そうはいつても、従来 — とりわけわが国では — この文学史は、名前が知られているわりには、中身の究明が十分に行われているとはいえないようである。というよりは、むしろ、ヘットナーの学問的営為それ自体がほとんど検証されることがなかったために、研究は、今なお限定的といわざるをえない状況にある、というのが正確なところであろう²⁾。その意味では、ヘットナーは、今もなお、名前は知られてはいるが、学問研究の詳細が不明なままの学者のひとりといってよさそうだ。

それゆえ、改めて、彼の学究の集大成である文学史『18世紀文学史』に焦点を絞り、その内容を分析検証することにより、ヘットナー・モノグラフィーに新たな戸口を開きたいというのが本稿の主意である。

それにより、19世紀ドイツ、とりわけ三月革命鎮圧(1849)後、社会の趨勢がリベラルから保守一辺倒の状況へと変容する、文字通り、激動の時代を生き抜いた一研究者の学問的態度(の変化)が明らかになることで、政治や社会の変化と密接に連動していた当時のドイツの学問研究の特殊性を示す一例が見て取れると思われる。

2. 革新のエネルギー：「フランス啓蒙」

「旧来の追放された啓蒙哲学の名誉を回復することが私の課題である」(Hettner)

ところで、18世紀ヨーロッパ史を紐解けば、とりわけフランス革命(1789～99)が世紀を代表する大事件、ヘーゲル流に言えば「もっとも新しい時代」³⁾の到来を告げる歴史の転換点として扱われるのが一般的であろう。

その際、政治的、経済的要因とは別に、思想的には、ヴォルテールやモンテスキュー、ディドロ、あるいはルソーといった哲学者(思想家)たちが提唱した革新的な理念理想 — まさに啓蒙思想 — が、直接間接にひとびとを触発し、

結果的に、大革命を準備したといった趣旨の説明がおこなわれる。

伝統の権威や既存の習慣慣習をはじめとして、人間生活にかかわる一切を「理性」の立場から問い直すことを目標とする啓蒙思想が、在来の価値観のみならず、社会構成それ自体をも大きく変動に導いたと考えられるからである。

このように政治や社会の既存の仕組みを根底から覆す可能性を内包する、その意味では、変革の起爆剤としての思想のエネルギーに着目した人物のひとり、それがヘルマン・ヘットナーその人である。

しかも、彼の場合、啓蒙の精神をたんに讃えるだけではなく、むしろその理念を、彼自身の時代の「現代」－ 19世紀中葉、三月革命挫折後のドイツ－ に〈活かし返す〉ことにより、現状に新たな活路が見出せないか、その手掛かりを模索した節が認められる⁴⁾。

なぜなら、『18世紀文学史』の第二部を構成する「18世紀フランス文学史」(*Geschichte der französischen Literatur im achtzehnten Jahrhundert*. 1860以下、「フランス文学史」)をよめば、そこでは、当時の「フランス啓蒙」を代表する作家、学者知識人たちが著した思想の〈歴史的意義〉が語られている。だがそれだけに留まらない。むしろ、それら個々の思想が後世に及ぼす影響、具体的には(ヘットナーの時代の)「現代」にまで及ぶ「作用」(*Einwirkungen*)を詳らかにすることにより、改めて、啓蒙の批判精神のアクチュアリティ、不変の有効性といったものが謳い上げられるからである。

言い換えれば、それは－ 政治的自由や人権の尊重を希求する－ 「18世紀啓蒙の闘い」に終わりはない。むしろ、「われわれは、今なお、この闘いの只中にいる」⁵⁾ という、ヘットナー自身の揺るぎない信念の表れと見ることができるであろう。

いずれにせよ、啓蒙思想へのこのような信頼(期待)が言説に勢いを生み、ある種、躍動感のある文学史が完成している。

それゆえ、まずはこの「フランス文学史」の内容を要約し、このあたりの事情を確認することから始めてみたい。その際－ 紙幅も考慮して－ フランス啓蒙の代表格である数名の人物(思想家)に的を絞り、彼らに対するヘットナー

の論評の要点を〈列挙〉する形で要約することにする。

3. 「18世紀フランス文学史」：「モンテスキューとヴォルテールはより深い歴史観と
いったものの基盤を措定した」(Montesquieu und Voltaire hatten die
Grundlagen einer tieferen Geschichtsauffassung gelegt)

「フランス文学史」の冒頭「第一の書」は、「フランス啓蒙文学
(Aufklärungsliteratur)の根源」⁶⁾をめぐる分析からはじまる。

時代は、ルイ14世の治世末期である。

ヘットナーに拠れば、太陽王を自認する国王の威勢にも次第に陰りが見え始め、政治はある種の転機をむかえていた。絶対王政は今や「偉大から衰微」へと局面が大きく変わりつつあったのである。こうした政治状況の変化に連動する形で、精神界においても、現状に異議申し立てを行うような「反体制文学」(Oppositionsliteratur)⁷⁾の萌芽が表れた、というのがヘットナーの見立てである。

こうした反体制派の筆頭に名指されるのがフランソワ・フェヌロン (François de Salignac de la Motte-Fénelon 1651 - 1715) である。その意味では、フェヌロンがフランス啓蒙文学の起点に見定められているといって構わない。

[F. フェヌロン]

ヘットナーのフェヌロン評、それは次のような言葉で始まる。

「フェヌロンの活動の内奥はおおむね政治的 (politisch) であった。〈フェヌロンは、宰相リシュリューやマザランと同じように、直接、自分で国家の舵取り (Staatsruder) を行いたかった〉という見方は、あながち誤りとはいえない。」⁸⁾

なにやら冒頭から「政治性」を強調するあたり、ヘットナーが「フランス啓蒙文学」の本質と捉える要素が、すでに示唆されているようでもある。

それはともかく、まずは神学者フェヌロンの優れた教育者としての側面 —

当時、ブルゴーニュ公の教育係を務め、この青年君主を「視野の広い」稀代の名君に育て上げた逸話 ― が強調される。その上で、フェヌロンの生涯の活動の軌跡が描き出される。

王権神授説の提唱で知られるボシュエとの対立はじめ、フェヌロンの広範な人間関係の中で生じた軋轢や葛藤について触れたのち、話題は、彼の代表作『テレマコスの冒険』(1699) に及ぶ。

ヘットナーに拠れば、この作品は、フェヌロンが思い描く独特のユートピアの表明であることに異論の余地はない。個々の場面描写や語りの調子は、ホメロスやヴェルギリウスの詩篇に倣っており、その意味では「文学的価値」が高い秀作ではある。

だが、その一方で、この作品には今ひとつ別の側面が認められる。

それは、ひとことでいえば、ある種の政治小説の性格である。作中、随所で語られる政治的「教訓」こそがこの作品の「核心」(Kern) であり、決して見落としてはならない、とヘットナーは断言する。

とりわけ、あるべき君主像の表明、すなわち、〈為政者は、私欲にはしらず、ひたすら民衆の幸福 (Wohl des Volkes) の実現に奉仕すべきである〉といった言葉は、当時の絶対王政 (ルイ 14 世) への痛烈な批判にほかならない⁹⁾。この点ひとつをとっても、フェヌロンが、既存の政体の「徹底的な変革」(gründliche Reform) を志向する改革派の代表格、言い換えれば、「恐れを知らぬ勇者」であることが判明する、と付け加えられる¹⁰⁾。

フェヌロンがしたためた多くの書簡も取り上げながら、改革者フェヌロン像を際立たせたのち、ヘットナーは ― 『テレマコスの冒険』の一節を引いたとでもいわんばかりに ― 次のような言葉で論を締めくくる。

「舵長 (かじおき) は、嵐を予告する不吉なミズナギ鳥 (Sturmvogel)

を殺しはできる。だが、迫りくる嵐は勢いを増し、とめようがない。」¹¹⁾

いわんとするところは、〈フェヌロンが撒いた自由思想の種、その芽は、いつとき摘みとられはしても、必ずや開花し、実を結ぶであろう。なぜなら、「自由」を求める「嵐」の襲来は、結局、なんぴとも阻止できないからだ〉というので

ある。

実際、こののち、啓蒙の批判精神は広く浸透し始め、市民的自由を求める気運はいやが上にも高まりをみせる。こうした状況のなかで「フランス啓蒙文学」は、文字通り「隆盛」期を迎えるに至る。

フェヌロンが撒いた自由の種、それは、まさに — ヘットナーが見るところ — 見事に開花し、実を結ぶことになる。

＊

それゆえ、「フランス文学史」第二の書は、「フランス啓蒙文学の隆盛（開花）」（*Die Blüte der französischen Aufklärungsliteratur*）といった表題が掲げられる。

そして、こうした「開花」の実例として、ヴォルテール（Voltaire 1694－1778）やモンテスキュー（Charles-Louis de Montesquieu 1689－1755）、ディドロ（Denis Diderot 1713－84）やダランベール（Jean-Baptiste le Rond d'Alembert 1717－83）といったわれわれにもお馴染みの思想家たちの言説、言動が取り上げられている。

それぞれの思想のエッセンスが、順次、詳細に分析、検証されているが、まずはヘットナーの論証順に従い、彼のヴォルテール論から見てみたい。

[ヴォルテール]

ヘットナーのヴォルテール評、それは概ね次のように纏められる。

まずはヴォルテールの性格（人格）だが、それは決して誉められたものではない。なぜなら、彼は、絶えず（自分に対する）周囲の評判を気にしては、苛立ちを隠さない。見栄っ張りで負けず嫌い、しかも、生来の皮肉屋で、時にはひとを不快にもする。ひとことでいえば、気難しい厄介な人物にしか思えないからである。

だが、彼の思想は別である。

ときに他人を傷つけるような「仮借ないウイット（エスプリ）」（*vernichtender Witz*）も、政治や社会が対象であれば「この上なく光り輝いた」。モンテスキュー

とは違い、なにがしか揺るぎない学説を打ち立てたわけではないが、批判は絶えず冴えわたり、その「作用」は今なお「全人類」に計り知れない恩恵をもたらしている¹²⁾、と考えられる。

これだけでも彼は、フランス啓蒙の一級の人物であることは疑いの余地はない。

ところで、このヴォルテールを突き動かす、いわば彼の批判の原動力は何かといえば、それは — 彼自身、イギリス体験（1727—29）で培ったと思われる — 徹底した「合理的思考」に求められる。

実際、そのはたらきは秀逸のひとことである。

なぜなら、それは、彼自身の生来の（批判的）気質と相俟って、絶えず既存の社会が内包する矛盾や問題点を突くことにより、民衆の不満を代弁したからである。それにより、「人類の福利と進歩」（Glück und Fortschritt der Menschheit）¹³⁾ に道が開かれたことは間違いない。

そのもっとも顕著な例は、ヴォルテールの「教会と神の啓示（Offenbarung）」への反発反抗に見て取れる、とヘットナーはみる。

それは次のような言葉となって表れている。

「ヴォルテールは、ひとときも休まず、力強く批判の槌打ち（Hammerschlag）を繰り返すことにより、やがて粗鉄は鍛え上げられていった。（.....）とりわけ<聖書は深淵だがポエジーでしかない>と見極めることで、ヴォルテールは、イギリスの同志たちと同様に、（教会への：筆者）理解や共感を決して示すことはありえなかった。」¹⁴⁾

要するに、ヴォルテールは、生涯、既存の宗教の権威とそれに支えられる社会秩序、言い換えれば、根拠は曖昧だが従わざるをえないような社会通念といったものに疑念を抱き、その妥当性を徹底的に問い直し続けた、その意味では、批判精神の体現者にして、啓蒙の「情熱的な闘士」¹⁵⁾ にほかならない。

しかも、その情熱（Leidenschaft）は、生涯、失われることはなく、並々ならぬエネルギーを保持し続けたので、「今なお、ヴォルテールの思想は命脈を保ち（lebendig）、現代のわれわれの生活の営みと努力のすべてに影響を及ぼ

している」¹⁶⁾ ことは疑いの余地はないと言って構わない。

いずれにせよ、ヴォルテールの思想、その革新のエネルギーは尽きることはなく、永遠に輝き続けるであろう、とヘットナーは指摘する。

いささか大掴みだが、ヘットナーのヴォルテール論は以上のように要約できる。

論全体をとおして、哲学者ヴォルテールの ― 人間性は別として ― 鋭い批判精神が讃えられると同時に、時代（時間）を超えて作用し続ける彼の思想の力（魅力）といったものが ― なにがしか期待を込めて ― 謳われていることは明らかである。

[モンテスキュー]

ところで、このヴォルテールと同じように、ヘットナーが、啓蒙の「闘士」のひとりに数え入れるのがモンテスキューである。

一般にモンテスキューといえば、『法の精神』で三権分立の必要性を説いた近代法（哲）学の父として知られるが、ヘットナーは、殊更、彼の政治性に着目し、〈モンテスキュー・イコール・政治改革の推進者〉（Mann der politischen Reform）といったレッテルを貼る¹⁷⁾。

フランス絶対王政を批判し、権力の分割による政治的自由の実現を提唱したモンテスキューの合理的思考を ― ヴォルテールの場合と同様に ― 強調することにより、一哲学者の政治的革新性を際立たせようとするのが、ヘットナーのモンテスキュー論の特徴である、とだけここでは指摘するにとどめておきたい。

いずれにせよ、ヴォルテールであれ、モンテスキューであれ、徹底して合理的思考に準拠し、所与（現状）に些かの矛盾でも認めればそれを告発し、その改善に努めた啓蒙の「闘士」の姿が強調される。

さて、批判の鋭さという点では、今ひとり、むしろこの二名を凌ぐ人物がヘットナーの目にとまる。多少、過激な側面は否めないが、批判の突破力は決し

て見落としてはならない、とヘットナーが高く評価する人物のひとりでもある。

[ディドロ]

それはディドロである。

なぜなら、先の二名（ヴォルテール、モンテスキュー）は、なるほど思想は斬新だが、根本的に、イギリスの「ニュートンやジョン・ロックが堅持したとおもわれる限界」¹⁸⁾、すなわち理神論（Deismus）を完全に克服するまでには至らなかった。だが、ディドロは、文字通り、なにもものにも拘束されることなく、批判精神を縦横無尽に駆使することにより、この「限界」を完全に「打ち砕いた」（niederreißen）と考えられるからである。

その意味では、ディドロは、ヴォルテールやモンテスキューに続く、いわばフランス啓蒙第二世代の勇敢な「指揮官」（Heerführer）¹⁹⁾ である、とヘットナーは見定める。

「あの壮大なスケールを誇る百科全書の創始者にして中心人物」²⁰⁾ であるディドロと彼の周囲の学識者たち — Encyklopädisten — は、いまや「理神論」を根絶やしにした。それどころか、自分たちの思想を — ラ・メトリ（La Mettrie 1709－51）がすでに体系化していた — 「唯物論や無神論」と一体化させることで、より先鋭な形に作り上げた、というのである²¹⁾。

これにより、フランス啓蒙は「限りなく熱しやすく、好戦的な（kampflostig）」²²⁾ 性格が決定的になった、とヘットナーは結論づけている。

フランス啓蒙思想に対するこうしたヘットナーの基本認識は、やがて文学史「第二の書」最終節におけるルソー論 — 「ルソーと民主主義」（Rousseau und die Demokratie） — に収斂することになるのだが、そこに触れる前に、今ひとりと、フランス啓蒙を代表する有名な学者知識人に対するヘットナーの人物評を取り上げておきたい。

先の数名に対する賛辞、あるいは共感とは対照的に、辛辣な評価が下されており、それだけに、否応なく目にとまるからである。

その人物とは、ダランベールである。

[ダランベール]

フランス百科全書派といえば、ディドロとともにダランベールの名前が挙がるのが一般的であろう。どちらもお馴染みの名前だが、ヘットナーのダランベール評は、ディドロへの賛辞とは対照的に、どこか冷たく突き放した感がある。

そのことは、すでに論冒頭の言葉からも明らかである。

「百科全書の創刊者のひとりとして、ダランベールは、フランス啓蒙文学のもっとも有名な人物のひとりである」と認めながら、その一方で、ダランベールの「哲学的著作は独自性に欠け、まったく鋭さが見られない」と切り捨てられるからである²³⁾。

「生後まもなく非情な親に捨てられた」孤児が、周囲の愛情に恵まれ、やがてひとかどの人物に成長する、という彼（ダランベール）の生涯を振り返れば、なるほど同情は禁じ得ない。それどころか好感さえもてる。実際、数学や物理学の分野では、ダランベールは「天賦の才」を如何なく発揮し、優れた論考を残しており、その功績はなんぴとも否定はできない。

だが、哲学 — 精神科学 (Wissenschaft des Geistes) — の分野に限って言えば、ダランベールの論証は、批判精神が欠落したお粗末なものばかりだ、とヘットナーは批判（非難）する。

おのずと結論は次のような調子で、取りつく島もない。ヴォルテールの受売りをよそおいながら、次のように述べている。

「ヴォルテールは、つねに言葉（標語）の達人であったが、ダランベールのことはいつもふざけて „プロタゴラス” と呼んでいた。ヴォルテールがこの言葉で言い表したかったことは疑いの余地はない。それは、プロタゴラスが、揺るぎない、つまり事実に基づく断固たる認識 (Erkennen) の可能性には、終始、〈異を唱える〉人物だ、ということである。」²⁴⁾

要するに、ダランベールは〈プロタゴラスのような古代ギリシアのソフィスト（詭弁家）の類である。弁論には長けているが、揺るぎない認識（真理）の

追究には、終始、懐疑的だ」とヘットナーの目には映るようである。

事の正否は別として、ダランベールは、結局、知名度が高いわりには実力が伴わない小物である。それゆえ、ディドロに並ぶべくもない、というのがヘットナーのダランベール評である。

論評は僅か数ページで終わり、その冷遇ぶりが際立っている。

さて、ルソー論に戻るとしよう。

[ルソー]

「ルソーと民主主義」、最終節のこの表題には、改めてヘットナーが思い描くフランス啓蒙の本質、言い換えれば、ヘットナー流フランス啓蒙観といったものが濃縮されていると見てよさそうだ。

端的にいえば、それは、ヴォルテールであれ、ディドロであれ、先に挙げた個々の思想家たちの「闘い」は、市民的自由、言い換えれば「デモクラシー」の獲得が目的であり、その仕上げを成し遂げたのがルソー（Jean-Jacques Rousseau 1712－78）だ、という認識である。

このことは、ヘットナーの次の言葉をみれば明らかであり、まさに彼のルソー評の核心が見て取れる。

「ルソーは民衆の申し子（Kind des Volkes）である。すなわち民衆を愛し、事柄の一切を、例外なく、民衆との直接の関係という視点から捉えた。」²⁵⁾

ルソーは「民衆」との連帯を重視する、まさに近代「民主主義」の伝令（先導者）と見做すことができる、というのである。

絶えず民衆の生活の実態を見据え、その改善を訴え続けたからこそ、ルソーの思想は、フランス（人）にとどまらず、広く他国の人々の心をとらえ、受け入れられてきた。それは次の事例からも明らかである、とヘットナーは指摘する。

「ルソーの影響は、〈人権〉思想を構想したフランス革命の英雄たちにとどまらない。ドイツのシュトルム・ウント・ドラング運動を先導した若

い巨人たちにも見出せるからである。すなわち、人間の〈知識と行動〉の直接性および全体性を求めてやまない彼ら（ドイツの青年知識人たち：筆者）の抑えられない衝動、言い換えれば、市民的秩序の強制への〈反発、憤り〉となって現れたのである。」²⁶⁾

当時（18世紀後半）、政治的にも社会的にも閉塞状態のなかにおかれていたドイツの青年知識人たち — ゲーテもそのひとりである — にとって、個人の「自然な感性」を生かしつつも、合理的批判に基づく平等社会を作り上げることがを標榜したルソーの思想は、現状への批判、あるいは解放への通路を見出す契機になったことは確かである。

それは、ドイツにあって、革命を導くまでには至らなかったが、少なくとも『若きヴェルターの悩み』を挙げるまでもなく — 社会の歪みや矛盾は如実にとらえ、あるべき市民社会の理想は示唆することができたのである。

このようにルソーの思想がドイツに及ぼした影響をみれば、この思想が、測り知れないエネルギーを内包していることは明らかである。それゆえ、彼（ルソー）が語る〈普遍の真理〉は国境を超えて、時代（時間）を超えて永遠に作用し続けることは疑いの余地はない、というのがヘットナーの分析である。

いずれにせよ、既存の体制や社会秩序の改変を促す、それどころか、時には民衆を直接の「行動」へ駆り立てることもありうる — このルソーの思想に代表される — 「啓蒙」の批判精神は、ヘットナーにとって魅力的であり、彼自身、改めて変革の原動力として期待していることが読み取れる。

＊

さて、これまで見てきたヘットナーの一連の — フランス啓蒙についての — 分析は、彼自身の次の言葉をもって纏めることができるであろう。なぜなら、18世紀「啓蒙の本質」といったものが、改めて明確に規定されているからである。

その言葉とは次のようなものである。

「16世紀には宗教改革という壮大なスケールの運動が生じたが、それ以後、これほどの激しさで〈精神の刺激〉、言い換えれば〈深淵かつ普遍的な革

命>が、ひとびとの見解や志向のなかで生じることはありえなかった。その意味では、18世紀の啓蒙は、宗教改革の ― 予想外に早く ― 中断を余儀なくされた作業（Werk）を再び引き継いだと考えられる。そればかりか、むしろ、宗教改革の所産を自立的、つまり、独特の形に作り替えたといえる。それゆえ、啓蒙思想が掲げる要求は、宗教改革にもまして大胆で、突破力（vordringend）がある。何事も容赦なく批判し、決して怯みはしない。」²⁷⁾（下線は筆者）

啓蒙思想は、精神の「革命」を引き起こしたという意味では、16世紀に生じた宗教改革の「作業」を継承する思想運動である。だが、そのパワー（ヘットナーの言葉でいえば「突破力」）は、宗教改革のそれを遥かに凌ぐことは、「フランス啓蒙」の個々の思想をみれば一目瞭然だ、というのである。

なるほど、ディドロであれ、ルソーであれ、彼らの言説は、時として ― 同時代のドイツの「レッシングやヘルダー、カント、あるいはゲーテやシラー」には決して見られないような ― ある種の「暴力性」（Gewaltsamkeit）、いわば「過激な側面」が見て取れることは否定はできない²⁸⁾。

だが、だからといって〈フランス啓蒙は軽薄で野蛮〉の一言で片づけてはならない。むしろ、彼ら（フランス啓蒙の代表者たち）は、人類の幸福に道を拓いた「パイオニア」（Bahnbrecher）として「感謝」されて然るべきだ、とヘットナーは結んでいる。

「われわれは、今や、森を伐り拓き平坦になった道を、躓くことなく安心して歩行できる。こうした恩恵に浴しているわれわれが、〈開拓者たちは、暗闇、未開の中で今日のような安全は確保できなかった。たびたび道に迷っては、迂回の末にようやく活路が切り開けたのだ〉と、彼ら先人たち（の不幸：筆者）を咎めてはならない。

オリュポスの神々は、〈乱暴な巨人たち〉を下界へ追放したが、のちの伝説は、この巨人たちに〈感謝〉し、彼らへの追憶を決して忘れはしない。」²⁹⁾

ヘットナーは、フランス啓蒙の「闘士たち」を改めて神話の「巨人」になぞ

らえて、くいささか性格は乱暴だが、われわれは、彼らの言動を、未来永劫、記憶にとどめずにはおれない」とその功績を讃えている。

4. 「18世紀ドイツ文学史」：「フリードリヒ大王により、小国プロイセンはヨーロッパ最強国の一つに変容できた」(Durch Friedrich den Großen ist das kleine Preußen zu einem der mächtigsten [...] Staaten Europas geworden)

ヘットナーの「フランス文学史」は、啓蒙が内包するラディカルな起爆性、有り体にいえば、「政治的自由」と「人権の尊重」を希求し、時には「行動」を促し先導するような思想の活力に共感し、むしろそれを讃えるような内容であることは前節でみたとおりである。

それゆえ、文学史の第三部ドイツ編（「18世紀ドイツ文学史」、以下「ドイツ文学史」）³⁰⁾も、まさにその余勢を駆って、既存のドイツの知が有する優れた批判精神、知の革新性といったものが謳い上げられるかと思われるのだが、結論からいえば、その予想は見事に裏切られる。

むしろ、印象は一変する。

なぜなら、文学史ドイツ編では、18世紀ドイツの文学や哲学、思想は、一見、啓蒙の批判精神の所産という文脈で語られてはいるが、その実、論証がすすむにつれて、ドイツ独特の「精神」（まさにドイツ精神）、あるいは「ドイツ的なもの」「ドイツ性」の発露といった形にいわば矮小化され、殊更、その特殊性、というよりは「傑出性」が謳い上げられる傾向が認められるからである。

その際、意図的かどうかは別として、個々の哲学、思想が内包していた（はずの）革新のエネルギーといった要素は言及されず、もっぱらドイツ精神の比類なき「偉大さ」がアピールされることになる。ヘットナーにいわせれば、それは啓蒙の「深化」の表れということになるのだが。

その典型的な事例が、フリードリヒ大王への賛辞に見て取れる。

「ドイツ啓蒙」といえば真っ先にその名前が挙がる、まさにドイツ史上、一級の人物だけに、ヘットナーも筆に力が入ったのか、国王の少年期からの成長

の過程を — 伝記しながらに — つぶさに書き記しては、やがて稀代の〈名君〉フリードリヒ大王の誕生を謳い上げている³¹⁾。

ヘットナー自身は、そもそもこの国王を誕生させた〈啓蒙の偉業〉を讃えたかったのであろうが、結果的に、フリードリヒ個人の「秀逸な」能力と彼の高邁な「精神」を称賛するといったような論調（の変化）が際立っていることは明らかである。

しかもそれは、この文学史（ドイツ文学史）だけに限らない。

フリードリヒ敬愛の念は抑えられないとばかりに、すでに先の「フランス文学史」においても、ヘットナーは、フリードリヒへの賛辞を惜しまないからである。

この国王が確立した政治の「原理原則と規範（Grundsätze und Maßregeln）」は、フランス啓蒙の影響に依拠していた³²⁾と認める一方で、ヘットナーは、フリードリヒ個人の「光り輝く指導力」は、ドイツが世界に誇る「素晴らしい実例（模範）」であると褒め称える。

その上で、彼は次のように述べている。

「フリードリヒ大王を介して、当時、政治勢力図の上で弱小国であったプロイセンは、今やヨーロッパ〈最強かつ最重要国〉のひとつに変容してきた。フリードリヒ大王は〈世紀の英雄〉（der Held des Jahrhunderts）と名づけられたが、それは、彼の外交上の制圧にとどまらず、むしろそれ以上に（優れた法規範の確立という：筆者）内政面の統治を介してまさに英雄に値したからである。」³³⁾

このようにしてフリードリヒは — 両文学史において — 三〇年戦争（1618－48）により疲弊したドイツを「暗闇」から救済し、やがて「最強国」のひとつへ導き統治した真の「解放者」（Befreier）、あるいは「英雄」と讃えられることにより、世界史上、類い稀な名君のひとりに位置づけられる。このあたりは、なにやらフリードリヒを介して、ヘットナー自身のプロイセン身びいきが伝わるような論調である。

いずれにせよ、〈ドイツ精神の優れた体现者であればこそ、成し遂げること

ができた偉業> とばかりに、フリードリヒ大王（の功績）には、惜しみなく称賛の言葉がおくられる。

文学や哲学の分野に目を転じれば、レッシングやヘルダー、カントやヴィンケルマン、さらにはゲーテやシラーといった — ドイツ思想史上、綺羅星のごとく輝く — 作家や哲学者たちが残らず取り上げられる。

結論からいえば、どの人物も、ドイツ一国にとどまらず、広く世界を見据え、万人の幸福を追求し続けた「精神の英雄」（Geistesheros）とばかりに絶賛される³⁴⁾。18世紀以後、ドイツは、文字通り、世界に誇るグレートシンカーを輩出し続けた、と自慢げに語られるのである。

さらに音楽の分野が、この文学史総覧に彩を添えている。

少年モーツァルトの楽才をいち早く見抜いた「ドイツ音楽の父」J. A. ハッセ（Johann Adolph Hasse 1699—1783）を筆頭に、バッハ、ヘンデル、ベートーフェン、モーツァルト、シューベルト……。と続くドイツ音楽の一大系譜が、逐一、跡付けられるからである。

ドイツ古典音楽を代表する錚々たる音楽家たちの功績を個別に分析しながら、どの人物も秀でた才能の持ち主であり、いずれ劣らぬ人類の「至宝」とまで持ち上げられる。

その上で、彼らを輩出したドイツがまさに<精神の国>であることは明らかだ。これにより、ドイツ民族の力（Volkskraft）が他国に較べて遥かに優れていることは論を俟たない、といった調子で、民族（国民）の優れた能力、その傑出性が誇示されるのである。

たとえば次のような一節もその一例である。

「(.....) ドイツが、文学および造形芸術の分野で、他の学識ある国民の後塵を拝していた暗澹たる時代でさえ、二人のドイツ人（バッハとヘンデル）が、どこか一国の芸術が18世紀に生み出した所産のすべてに勝る功績を遺したという見事な事実をわれわれは喜ばずにはおれない (.....)。バッハとヘンデル、このふたりの音楽家は、一切の混乱や抑圧にもかかわらず、根本的にドイツ民族の力（die deutsche Volkskraft）が、依然、

不屈であった（……）ことを示すこの上なく輝かしい証である。」³⁵⁾

どこかのちのナチの国粹的民族主義を彷彿させるような論調だが、いずれにせよ、こうした言説をみれば — 先の「フランス文学史」から読み取れる — ヘットナーの狙い、すなわち、啓蒙の理性のはたらきを個別に跡付けることにより、改めて、啓蒙の革新的な「作用」を際立たせ、その力を「現代」に活かしたいとする彼の意図は、むしろ大きく変容したといわざるをえない。

むしろ、ドイツ精神の特殊性を讃える、その意味では、ナショナリスティック（愛国的）なドイツ讃歌、場合によってはプロイセン賛美と見紛うような文学史が完成していることは明らかである。

もっとも、こうした文学史独特の雰囲気が、結果的に、19世紀後半のドイツの社会的気運、すなわち、国家統一に向けて勢いを増す一方のプロイセン・ナショナリズムに合致、というよりは、むしろそれに同調、あるいは助長することにより、この文学史は— A. F. C. フィルマル (A. F. C. Vilmar) の『国民文学史』(*Geschichte der deutschen National-Literatur*)³⁶⁾ などとともに — 市民家庭必携の書、いわば「家宝」(*Haus - und Familienschatz*)³⁷⁾ として人気を博し、版を重ねることになる。

5. まとめ

以上見てきたことは、次のように纏めることができるであろう。

ヘットナーは、「啓蒙」の精神の発露を、国別に「分析」し、それらを「総合」することにより、18世紀啓蒙の思想運動全体 — まさに「18世紀文学（思想）史」 — に、なにがしか大きな脈絡をつけようとしたことは疑いの余地はない。

背景には、ヘットナー自身の旺盛な研究意欲、すなわち、彼の時代（19世紀）の「現代」に至るまで「広範かつ強力」に「作用」を及ぼし続ける啓蒙思想のスケールの大きさに魅了され、その真髄をどうにか究明したいとする、学者ヘットナーの純粋な探求心、真理追求への飽くなき思いがあったことは、彼の文学史の序文からも明らかである。

だがその一方で、今ひとつ、別の狙いが見えてくる。

それは、ひとことでいえば「啓蒙の復権」を図るという、ある種、野心的な目論見といえる。

なぜなら、世紀中葉、三月革命鎮圧（1849）後のドイツにあっては — 政治であれ、言論であれ — リベラルな思想が急速に退潮傾向を示す一方で、ナショナリズム、それも、殊更、愛国心を鼓舞するような極端な立場（言説）が圧倒的に勢いをましていた。

こうしたいわば思想（言論）の一元化がすすむ状況のなかで、ヘットナーは、革命の挫折により「追放の身となった」啓蒙の〈批判精神〉を呼び起こし、その活力を生かし返すことにより、どうか「市民的自由」（デモクラシー）獲得の手掛かりが見出せないか模索した、と考えられるからである³⁸⁾。

彼の言葉でいえば、それは「旧来の追放の身となった啓蒙哲学（Aufklärungsphilosophie）の名誉を回復する」ことにほかならず、これこそが、今、自分がはたすべき「課題」であると自覚したといえる³⁹⁾。

彼自身、明言しているわけではないが、その具体的な表れのひとつが、「18世紀フランス文学史」の構成と考えられる。

もっとも、ひとくちに啓蒙の復権といっても、革命前の三月前期とは違い、リベラルな政治アピールを、直接、声高に主張することは、到底、許される雰囲気ではない。

だが、文学史記述といった形をとれば、間接的だが、市民的自由の理念や民主主義の理想は伝えることができたのである。

「フランス啓蒙」が、当時、フランス民衆を触発し、やがて革命を引き起こすに至るまさに市民社会形成の過程を「描き出す」ことは、極論すれば、ヘットナーの時代のドイツの現状に対するある種のアンチテーゼの提示であり、彼なりの精一杯の反発反抗の表れと捉えることができるであろう。

だが、続く「ドイツ文学史」になると、こうした態度は影を潜め、むしろ論全体の雰囲気は一変する。それは、ヘットナー自身の文学史編纂の意図が変わったかと思えるような変化でもある。

ヘットナー本人は、ドイツ思想史を代表する作家、哲学者、あるいは芸術家個々の功績を分析することにより — 「フランス文学史」と同様に — 啓蒙の理性の力を謳い上げようとしたのだろうが、結果的に、崇高なドイツ精神を誇示するような偉人伝、あるいは、プロイセン身びいきとしか思えないような文学史が完成しているからである。

執筆の途中で彼自身の考えが変わったのだ、といえはそれまでだが、改めて、この文学史執筆当時（1860年代後半）のドイツの政治的社会的状況を考え合わせれば、事はそう単純には済まされない。

むしろ、こうした現象は、本来、啓蒙の理性に準拠して〈変革革新〉を標榜しながら、本人も気づかぬうちに、政治の趨勢に飲み込まれ、やがて現状肯定的（affirmativ）な態度に陥っていった、一研究者の学問的態度の変化と捉えるのが妥当と思われる。

実際、ヘットナー自身、プロイセンによる国家統一（1871）が現実味を帯びてくると、興奮のあまり、「今やドイツ人であることは喜びであり、誇りである！ 48年（革命当時）の党派概念はもはや通用しない」⁴⁰⁾ とまで明言し、自分がこれまで支持してきたリベラリズムとの決別ととれるような態度を示している。

当時の政治の風圧はそれほどまで強かったと考えられるが、いずれにせよ、こうしたヘットナーの例は、政治や社会の変化と密接に連動していた19世紀ドイツの学問研究（アカデミズム）の特殊性を示すひとつの証と捉えることができる、というのが私の見方である。

注（Anmerkungen）

¹⁾ 『18世紀フランス文学史』第4版の序文（1880）参照。引用は*Geschichte der französischen Literatur im achtzehnten Jahrhundert*. Fünfte verbesserte Auflage. Braunschweig: Druck und Verlag von Friedrich Vieweg und Sohn, 1894 に拠る。

²⁾ 数少ない論究として、筆者の論考『ヘルマン・ヘットナーとその時代 — 一九世紀ドイツにおける学問的ディスクールの変容』（防衛大学校紀要111輯、2015）参照。

および口頭発表「ヘルマン・ヘットナーとその時代 ― 一九世紀ドイツにおける知の変容」(2010年 日本独文学会秋季研究発表)。

- 3) Vgl. ハーバマス『近代の哲学的ディスクールI』(三島憲一・響田収他訳、岩波書店、とくに第I章参照)
- 4) 48年革命前はもちろんだが、革命鎮圧後の復古的時代状況にあっても、ヘットナーはじめ、「本来リベラルな政治志向の哲学者(知識人)の目には、<政治的自由>と<人権の尊重>をもとめる啓蒙の要求は、実践的な模範と映った」と考えられる。(Vgl. *Hermann Hettner. Geschichte der deutschen Literatur im achtzehnten Jahrhundert*. 2 Bde, Berlin/Weimar: Aufbau, 1979 巻頭のGotthard Erler による序文、S. XXXIII.)
- 5) Vgl. *Geschichte der deutschen Literatur* ..., a.a.O., S. XLVI.
- 6) *Geschichte der französischen Literatur*..., a.a.O. [Anm.1], S. 1.
- 7) A.a.O., S.22.
- 8) Ebd.
- 9) *Geschichte der französischen Literatur*..., a.a.O., S.27.
- 10) A.a.O., S. 29.
- 11) A.a.O., S.33.
- 12) A.a.O., S. 144 und 175.
- 13) A.a.O., S.175
- 14) A.a.O., S. 176
- 15) A.a.O., S.175.
- 16) A.a.O., S.137.
- 17) Vgl. Heinrich Morfによる『18世紀フランス文学史』第5版の序文(1894)参照。
- 18) *Geschichte der französischen Literatur*.... [Anm.1], S.265.
- 19) A.a.O., S.267.
- 20) Ebd.
- 21) *Geschichte der französischen Literatur*..., a.a.O., S.265.
- 22) A.a.O., S. 278. ヘットナーに拠れば「百科全書は、あらゆるジャンルの学者、思想家たちが、自分たちが獲得した知の富を預けては全容を見渡すことができるような<平穏な倉庫>ではなかった。むしろ巨大な(.....) 攻撃兵器 (Angriffswaffe) そのもの」と考えられる (S.274)。
- 23) A.a.O., S.344.
- 24) A.a.O., S.351.
- 25) A.a.O., S.444.
- 26) A.a.O., S.447.
- 27) A.a.O., S.553.
- 28) A.a.O., S.559.
- 29) Ebd.
- 30) 以下、『18世紀ドイツ文学史』は*Hermann Hettner. Geschichte der deutschen Literatur im achtzehnten Jahrhundert*. 2 Bde, Berlin/Weimar: Aufbau, 1979 参照。
- 31) なお、この「ドイツ文学史」については筆者の論考(注2)も参照。
- 32) *Geschichte der deutschen Literatur*.... (Bd 1), a.a.O., S. 327-348.
- 33) *Geschichte der französischen Literatur*.... [Anm.1], S.561.
- Ebd.

- ³⁴⁾ たとえばヘルダーは「ドイツの最も重要な精神の英雄」のひとりと讃えられ、とりわけ彼の初期の著作が高く評価されている。Vgl. *Geschichte der deutschen Literatur*.....(Bd 1), a.a.O. S. 81. ほかに「人類の解放者」(Ch.トマジウス)、「天来の唯一無比の存在」(ヴィンケルマン)など、各人物に対する尊称は枚挙に暇がない。
- ³⁵⁾ *Geschichte der deutschen Literatur*..... (Bd 1), a.a.O., S. 316.
この引用は、筆者の論考「三月革命期前後におけるディスクルスの変容」(防衛大学校紀要 119-120輯 2020))でも取り上げたが、そこでの論証も参照。
- ³⁶⁾ A.F.C. フィルマルの『国民文学史』については、上記の論考「三月革命期前後におけるディスクルスの変容」を参照。
- ³⁷⁾ フィルマルの『国民文学史』21版(1883)に付されたKarl Goedekeによる序文参照。
- ³⁸⁾ 三月革命鎮圧後、ヘットナー自身、時勢の変化を読み取り、それまで自らが信奉していたヘーゲル左派流の学問観を修正することで、自己の学的ステイタスの保持を図っていることは、『ロマン派』論(1850)以後の彼の一連の著作から明らかである。だがその一方で一面従腹背ではないが — 今なお、リベラルな理念理想、変革への希望は捨て切れない彼自身の葛藤(アンヴィヴァレントな思い)が、こうした啓蒙の復権という目論見、あるいは「フランス啓蒙」への共感となって表れたと考えられる。
- ³⁹⁾ 1863年3月14日付のゴットフリート・ケラー宛書簡参照。
- ⁴⁰⁾ Vgl. Adolf Stern, *Hermann Hettner. Ein Lebensbild*, Leipzig: F.A.Brockhaus, 1885, S.232.